



文集

(報告と参加者感想文)

日時 2017年2月15日(水)~19日(日)

場所 日本基督教団 十日町教会

主催 関東教区宣教部

巻 頭 言

感 想 文

雪掘りキャンプ報告

雪掘りキャンプディレクター 長倉 望 (新潟教会牧師)

今年も2017年2月15日～19日、十日町教会を会場に、「出会う！働く！考える！十日町雪掘りキャンプ」が開催されました。関東教区宣教部主催の青年キャンプとなって3回目となりますが、毎年このキャンプを楽しみに参加してくれるリピーター、その人たちの誘いで新たに参加してくれる人、また“被災支援トレーニングキャンプ”というユニークなあり方に意義を見出し参加してくれる人など、様々な人たちが集い、今回のキャンプは総勢33名と大所帯でした。

新潟は、昨年ほどではありませんが、今年も小雪の年でした。現地の方の感覚では、例年の6割くらいの雪だ、とのこと。実際のワークでは、十日町教会員のご家庭と栃尾教会、また十日町教会近隣の除雪作業を行うことができました。また、雪掘りのワーク先で、雪国ならでの暮らしや、中越地震の時の経験を伺う時も、参加者にとっては貴重な時間でした。

今回は、十日町教会に着任された久保田愛策牧師への引き継ぎも含め、京都から新井純牧師にも講師として参加いただきました。夜の学びの時間では、新井純牧師より中越地震の被災と十日町教会ボランティアセンターの働き、そして東北教区被災者支援センターエマオの専従スタッフとして5年お働きになった佐藤真史牧師から、震災の中で出会ってきた出来事、一人ひとりの物語、ボランティアセンターの物語を伺いました。また柴田信也牧師からは、長きにわたり被災支援の現場で働いてこられた経験によって培われた“被災支援哲学”とも言うべきお話を伺うことができました。毎朝の礼拝でも、それぞれの体験と聖書からのメッセージが分かちあわれ、よき学びを持つことができ感謝でした。

受け入れてくださった十日町教会の皆さん、参加者を送り出してくれたそれぞれの教会とご家族、様々な配慮をもって参加者を受け止めてくださった久保田愛策牧師とご家族に心から感謝いたします。



【S. A】新潟教会 中3

今回初めて雪掘りキャンプに参加してみて、最初、朝から終わる時間までずっと雪掘りやら雪かきのことをやっていて、お家の人の話を聞いたり、こたつでゴロゴロなんてないと思っていました。でもちがくて、行った先のお家の人と話をし、いろんなことを聞いて新しい発見や情報があって、私は雪掘りに行けて良かったなと感じました。そして、行ったお家の人とお話をしたりして関わると、優しさなどを感じてすごくいい出会いなんだなとも感じました。私はキャンプのほとんどを教会で過ごしていました。その時に、周りの仲間と協力して何かを行うということの大切さを改めて感じたり、幼稚園の子たちと雪を集めて、運んだりして小さい子たちと関わって、小さい子たちとどう接するかなども改めて知ることができました。雪掘りや、一緒に雪像を造ったりすることで初対面の人たちとの間にも少しずつ会話が生まれて、たくさんいろいろな話しができ、雪の力かな？などとも思いました。

夜の3回の被災支援などの話では自分が知っていたことと、知らなかったことと両方の話を聞けました。話を聞いているときに自分も福島で東日本大震災を経験しているので、わかるなと感じた部分もありました。十日町含めの中越地震や、阪神淡路大震災のときに、なにがあったかなど私は一切知らなかったもので、今回お話を聞いてたくさん知り、学ぶことができたなと感じています。また、いろいろなお話を聞きたいなとも思いました。私は、雪掘りで感じた細かいことは、話など言葉でまとめるのは難しいなとも感じました。雪像も初めて造ったけど、最初から形を造るのではなく、雪を積み、固め、削りとやって造ることに驚きを感じました。

私は雪掘りに参加できよかったとすごく思います。新しい出会い、発見、学びがあってすごく楽しくいい4日間を過ごせたなと感じました。

【K. U】新潟教会 中3

とても楽しくて充実したキャンプでした。いろんな仲間や地域の人、教会員さんといろんなことを語ったり、コミュニケーションを取ることができ、すごくよかったなあと感じます。教会員さんのお家の雪掘りでは温かく迎えて下さり、

雪掘りがニガテな私はすごくほっとしました。

休憩の時間にはたくさんのおかしなどをいただき、いろんなことをお話しました。

教会員の方はそのたわいもない会話をすごくうれしそうに聞いてくれました。その方は私たちが雪をたくさん掘るよりも一緒におしゃべりをするほうがうれしいうでした。

私はそこで夜の学習会でも教えてもらったように、ボランティアとして大切なのは、たくさん働くことも良いのですが、一番は親身になって相手によりそうことなんじゃないかということがわかりました。

私はボランティアというのが今まではあまり身近に感じていませんでしたが、今回のキャンプに参加することで、災害やボランティアについて、より深く学ぶことができ、自分は震災とどう向き合っていけばいいのかを考えるいい機会にすることができました。

これからも「スローワーク」と「よい信頼関係をきずく」ということを頭に入れて日々過ごしていきたいと思ひます。



【U. J】高3

4日目の時にも話したのですが、最初は敬和でキリスト教のことを学んでいたとはいえ実家での仏教と関わっていた時間が長かったため、あまりキリスト教に馴染めていませんでした。ですが、周りの人たちのあたたかさに支えられました。現に新しい出会いがありました。

雪掘りでは、糸魚川のボランティアの時に実際の現場に行くことが大切だということを学んだので、雪害と共に生きている人達と関わることもまた、直接の話を聞くことができよかったです。

夜の勉強会は、僕がこの雪掘りキャンプで1番楽し

みにしていたことだったので、本当に貴重な話を聞けたと思っています。また、このようなボランティアに参加することや将来の仕事で被害をできるだけ少なくできるように努力していきたいと思ひます！

今回は本当に参加させて頂きありがとうございます。

【T. M】栢尾教会 高3

私は正直、家にもやることがないし、時間もあつたのでじゃあ参加してみようという気持ちでこの雪掘りキャンプにくることを決めました。ですが、4泊5日のこのキャンプを通して様々な方々と出会い、関わっていくなかで感じるものがたくさんありました。

雪掘りキャンプというくらいなのだからイメージとしては、ただひたすら雪を掘る作業をするのかなと思ひていました。ですが1日目、2日目、3日目と雪掘りのワークをすればするほど、大切なのは効率よく除雪することではないということに気づいていきました。たとえ作業がそれほど進んでいなくても「疲れたでしょ。あまり無理しないで、休んで下さいね。」という言葉をかけていただき、また作業がひと段落つくとお茶をだしてくださりゆっくりとお話をする時間を持つことができました。そこで私が感じたことは、一番大切なことは雪掘りを受け入れて下さった方々との交わりの時間だということです。交わりの中で、雪国ならではの知恵やその土地の歴史などたくさんのお話を聞くことができました。ただ雪掘りをするだけでは生まれなかつた温かい雰囲気があるところにはあり雪掘りをして良かつた、またさせてもらいたいと思ひました。そして雪掘りのワークを通して、わたしは改めて雪とともに生活することの大変さを感じました。今回雪掘りをさせていたただいたお宅のほとんどが普段は一人で作業をしているとおっしゃっていました。私も比較的に雪が多い地域で生活していますが、今まで真剣に雪掘りをしてこなかつたことをとても悔やみました。私は春から雪の無い地域へ行きますが、冬場毎日のように重くて硬い雪と共に生活している人たちがいることを忘れてはいけないと感じましたし、機会があれば雪掘りをしに帰ってきたいと思ひます。

今回の雪掘りキャンプに参加できてよかつた思ひ理由の一つに色々な先生方のお話を聞くことができたことがあります。何度も被災地に足を運んでいる方々や被災者支援センター・エマオで働かれている佐藤真史さんや柴田信也さんのお話をきくことが出来たのはとても貴重な経験でした。特に私は佐藤真史さんのお話

を聞いているとき、ハッとさせられました。なぜかという、私の中で少しずつ東日本大震災の記憶が薄くなっていたことに気づかされたからです。震災から6年が経ち、テレビでは現状がほとんど放送されなくなっても放射線や仮設住宅などの問題が今もなお残されていることを再認識しました。そして3.11は過去形ではなく、現在行形なのだという真史さんの言葉を決して忘れてはいけないと思いました。そして“共に生きる”とはどういうことなのかということをお自身考え続け、その時その時にやるべきだと思ったことを行動に移していくことができる人になりたいと思いました。

初めての雪掘りキャンプでしたが一日一日がとても充実していました。雪掘りのワークや先生方のお話を通して色んなこと学ぶことが出来たし、雪掘りで出会った仲間と毎晩のように騒いだこともとても思い出に残りました。ぜひまた参加したいともいいました。



【U. A】新津教会 高3

私は今まで祖父母が被災したにも関わらず、あまり震災に対しての意識がなかったように感じます。被災しているところに何が必要で、どんなケアが必要だとか、いまいち、ピンッと来ていませんでした。たった一瞬の出来事でも、今も支援が必要不可欠であることは、漠然とわかっていたつもりでした。震災のことがドドドッと現実味を出して目の前に突きつけられた気がしたキャンプでした。

また、雪を掘る中で、効率！しか考えがなかった私ですが、それだけが全てじゃないことを知りました。話をしているとき、穏やかな表情になって、嬉しそうにいろんなことを語る教会員の方々の姿がとても眩しく私の目にうつりました。

私にとって、震災のこと、スロークのこと、いい意味で大きな衝撃が2つあった5日間でした。

【T. H】新潟教会 大学生

スロークの大切さ

今回、初参加となった四泊五日の十日町雪掘りキャンプ。数多くの経験をする事ができました。

私の地元である富山でも雪は降り積もったり、部活動でも雪かきをしていたので、雪を目にする機会はありました。しかし、十日町の積雪量は私の予想を上回るほどの多さでした。それでも毎年の平均に比べると八割ほどだというので唯々驚き、これからの雪掘りワークをこなしていけるか心配になりました。これがキャンプ当日の正直な感想です。

このキャンプは、午前、午後と十日町教会周辺や十日町に長年住まわれている方のご家庭に赴いてワークをし、夕方は元十日町教会の牧師などのお話を聞く流れでした。この感想文では、まずはじめに被災支援学習プログラムのこと、つづいて雪掘りでの出会い、発見、経験について書いていきます。

被災支援学習プログラムでは、地震などの災害を経験された三名の方が自身の行動体験したこと、感じたこと、思っていることなど、日ごとにお話しされました。ここでは私が特に印象に残った一人である元十日町教会、現在は世光教会(京都)で牧師をされている新井純牧師のお話を振り返ります。

純牧師は、2004年7月13日を中心にした新潟・福島豪雨に、幼稚園の園長という立場もあり、現場に駆けつけられなかったこと、その後悔もあり、同年10月23日に発生した新潟県中越地震では十日町教会を避難所として避難者を受け入れ、ボランティアセンターとしても派遣をおこなったこととお話しされました。また、避難所を設ける際に、群馬県からも応援に駆けつけてくれる人がいたこと、それが自分の自信につながったこと、震災が起こったときに声かけをしなくても自然と応援に駆けつけるという“信頼関係”があったからこそ、避難所を設けることへの思い悩みは解消されたそうです。純牧師は、これらの行動は、自身が迅速に動くことができたから、そして教会にいた人々の動きが良かったから結果がついてきた、とも言われました。

そして、同年の冬から兵庫教区の長田センターや、関西中心のイエス団を中心に十日町で除雪ボランティアが行われるようになり、その活動が現在も続いています。その原動力として、ボランティアに来た人を歓

迎する、どんな人に対しても“welcome”の気持ちで受け入れること、これにより、周りの人々も同様の気持ちを持つことができるんだ、と最後に話されました。この一連の純牧師のお話を聞いて、信頼関係を築くためにも日頃のつきあいを大切にしなければならないこと、常に相手に対して感謝、敬意をもつべきだということ学びました。

雪掘りでは、三つのご家庭に赴くことができました。一軒目の関口さんのご家庭では、関口さんが家主のアパートの屋根から落ちた雪を、除雪機で除雪しやすいように下へ下へと降ろしていくワークでした。途中除雪機が雪中から抜けられなくなることもあり、私を含めそこにいた4人でようやく脱出させることができました。しかし、普段私たちがいない状況で起こったら、また雪が積もる度にこのワークをしているのかと思うと、自分の無力さとなんともいえない気持ちになりました。

二軒目の須藤さんのご家庭では、雪掘りとワーク先でのコミュニケーションを大事とする、“スローワーク”をより実感できる場となりました。関口さんのご家庭とは反対で、屋根から落ちる雪の分のスペースを空けるために、雪を上によかす作業を行いました。ワーク三十分ごとにお茶をいただいたり、自家製の味噌とお餅、そしてお昼ご飯をご馳走になったり(須藤さんのお父さんが大のサッカーファンであることも知りました)、とても温かく私たちを迎え入れて下さいました。三軒目は野村さんのご家庭に伺いました。駐車場に積もった雪を用水路に捨てていくワークでした。ワークとしては人数も多かったこともあり、簡単なワークとなりましたが、用水路に雪を捨てる度にありがとう、本当に助かります、とおっしゃっていたのが今でも印象に残っています。また、休憩の際には、君たちは若いんだからこれから何でも挑戦しなさい、つまずいても必ず周りの支えがあるから、とお話しされ、とても感銘を受けました。

どのご家庭でも、私たちがボランティアとしてワークをしているのに、様々なところで逆に人の温かみや元気をいただきました。これも十二年間このキャンプが続いている一つの要因になっているのだろうと感じました。

他にも、十日町教会に併設している十日町幼稚園の幼児たち、ツムツム(雪像)、日々の疲れを癒やしてくれる温泉のサウナ室でのおじさんとの出会い、岡村翼君の十日町高校での弾き語りライブ、そして今年雪掘りキャンプに参加した皆さん。すべての出会い、経験に感謝いたします。

この四泊五日の雪掘りキャンプを終えて、これからもスローワークを通して様々な思い、経験が得られるこのキャンプがこれからも続いていくことを望んでいます。私自身、来年も参加したい、と思うことのできた充実した五日間となりました。

【A. T】新潟教会 大学生

「ゆっくりと、休みながら。」

昨年の雪掘りキャンプが終わった直後から待ち焦がれること1年。今年も雪掘りキャンプが開催され、それに参加することができた。4回目の参加にして初めて初日から参加した今回のキャンプ、5日間通して考えていたことが1つある。それは「自分が災害現場に居合わせたらどうするか」ということである。

わたしは今年3月に大学卒業を控え、春からは教師として働くことになる。自分のことだけを考えていればよかったこれまでとは違い、今後は社会人として、また人の子どもを預かる身として責任のある行動が求められることになる。そのような中で地震などのような自然災害に見舞われたときどのような行動をすればよいのか、そのことをイメージしながら5日間過ごしてきた。

そんな中で印象に残っているのは二日目に佐藤真史先生の話の中で出てきた「スローワーク」という言葉。それまで「災害がおこったときにはまず生徒の安否確認、それから避難場所になるであろう学校での動き、さらにそれ以外で自分に出来ることは…」と想像の中で休まず働き続ける自分にストップをかけたのがこの言葉だった。常にバタバタと動き続け、働き続けていてはいつか爆発してしまうよ、だから休憩しながらスローペースで働こうよ、と。

わたしはじっとしているよりも動いている方が好きで、実際雪掘りのワークでも休憩もほとんど取らずひたすら除雪作業を無心で行っていた。休憩をして座ってお茶をすすっている時間は短く、動いているときの方が楽しいとも感じていたように思う。言われてみれば確かに作業が終わった後に達成感や充実感といった心地よい疲れともに蓄積されていく正体不明のなにか。それは連日の遅寝早起き(自業自得)とは関係ない(はずの)もの。それが溜まって行って4日目。この日のワークは午前中のみだった。一緒に作業をしていた数人と休憩をとり、さああと少し頑張ろうかと動き出そうとしたとき、自分の中にある違和感を覚えた。なかなかやる気が出てこない。皆と同じだけの作業はこなしているけど楽しくない。早く終わらないかなとさえ

思ってしまう瞬間もあった。真史先生の言っていたのはこれか、と思った。幸いなことにそうなるからほどなくワークは終了した。

もし今回のキャンプに参加せず、就職した先で自然災害に見舞われたら、自分は忙しい現場でこの現象に遭遇していたであろうと思う。しかし自分も周りも忙しいため作業を続けざるを得ず、こうなってしまった上で作業を続けることはさらなるストレスの原因となり、もっと自分を苦しめることになるだろう。話を聴いていたときは「まあ自分は動く方が好きだし大丈夫でしょ」と思っていた。しかしそうではなく、誰だって働きすぎはストレスになるし誰も幸せにならない。今回のキャンプではこのことを学んだことが一番大きいと思う。

このキャンプで毎年たくさんのもので得るが、それは全て今後生きてくるものばかりである。来年、就職して1年目の年度末という忙しい時期に果たしてこのキャンプのことを考える余裕があるのか見当もつかない。しかし可能ならまた来年もこの豪雪に囲まれた町に帰ってきて仲間たちと再会し、この地に生きる人から、また被災地で生きてきた人たちから学びを得ることができたらうれしいと心から思う。



【O. T】新潟教会 大学生

僕は今年、十日町での雪掘りキャンプは（前身の雪掘りツアー含めて）4回目の参加となりました。もう4年も経つのか…と、数えてみて驚いていますが、初めて参加した年から毎年、この時期に案内を頂いたら、迷わず参加を決めていたように思います。その理由として、「みんなと会えるのが楽しいから」というのも勿論大きいですが…このキャンプから帰って来ると、どこか気持ちが元気付けられている自分がいるからでした。

今年もすぐに参加を決め、ワークなどのプログラムで心と体を動かされた数日間を過ごしました。今年はいくつもの経験から、どこから僕はこのキャンプから元気をもらっているのか、わかった気がします。

雪掘りキャンプに来ると、たくさんのお話を聞きます。支援のあり方や長期支援の難しさなど、多くの学びがあったお話の中で、特に柴田先生の言葉が心に残っています。「大きな出来事に遭った時、悲しみを自分のものになるまで悲しむ必要がある。」支援者としての正義感やスピードではなく、相手の感情に近づき、寄り添うことが何よりも大切で、それこそが共に生き共に歩く事の意味なのだ、といったメッセージと共に語られた言葉でした。僕はその言葉を聞いたとき「あ、そうか。」と、目から鱗が取れた様な感覚を抱きました。自分自身が福島で被災した経験と重ねていたのです。

僕は6年前の3月11日、実家がある福島県矢吹町で被災しました。が、正直、福島で被災した記憶をはっきりと思い出すことが出来ません。原発事故後、放射線から逃れる為に身内の家を転々としたり、その後間もなく大学での生活が始まったり…目の前の生活に慣れるので精一杯で、18歳の僕には、震災の事に目を向ける余裕が無かったからです。

たまに実家に帰ると町の補修工事がみるみる進んでいて、「復興のため・地元のため」と動き続ける方々の姿をみていると、被災地から逃れ「普通の生活」に落ち着いた自分は、被災者を名乗れないと感じていました。そうしているうちに、被災した体験や当時抱いていた感情を言語化できないまま流してしまっていたように思います。

本当は震災時に自分が真っ直ぐ向き合いたかった感情、「自分のもの」にする筈だった記憶。それらを僕は、めまぐるしく駆け抜けた時間の中で、2011年3月に置いてきてしまったのだと柴田さんの言葉から知ることができました。そして、今まで参加したキャンプ中、たくさんのお話を聞く中から、震災当時抱いていたモヤモヤを言葉として取り戻していたことに気付かされました。等身大の自分を切り出され、真っ直ぐ立つ事ができるような気持ち…。このキャンプで僕の中に生まれる元気の源は、そんなところにあったんだと思いました。

同時に、柴田さんが関わられた被災者の方が語られた言葉が強く胸に刺さりました。「災害に取り憑かれたようだ」「被災者をやめたい」という言葉です。震災という事実から目をそらしていた自分や、今も続いている震災の余波に、また気付かないフリをしていた自分を突き付けられたように感じられたからです。真っ直

ぐに現状を見つめられない弱い部分を実感し、またも等身大の自分に気づかされたのでした。

キャンプから帰って来て、あそこで抱いた気持ちを、これからどう「自分のもの」にしていくのか問われています。講師のみなさんの言葉には重みがあり、とにかく説得力がありました。そして僕も、あの人たちのような言葉を語れるようになりたいと思いました。素直に言葉にできないもどかしさも恐怖も含めて、自分の感情や身の回りの出来事に耳を傾けて、言語化すること。そして、とりあえず行動すること。まずは日々の生活から、少しずつ変えていかなければと思います。

最後に、今年も雪祭りにて、出演の機会を頂きました。雪掘りに参加し、雪深い十日町での暮らしを体験させて頂いたからこそ、「雪を友とし、雪を楽しむ」そんな十日町のスピリットに向けて感謝の思いでステージに立てました。ネギでの熱烈な応援、本当にありがとうございました。(スタッフが美味しく頂きました。)



【U. A】新潟教会 社会人

余韻に浸っています。しかしこれは、私が現実に戻ることを拒みたくなるような後ろ向きの名残惜しさではなく、この数日間で体験したこと考えたこと、かけてもらった言葉を忘れちゃだめだよ、と言い続けてくれる余韻です。今回で2度目の参加となりましたが、行かないという選択肢はなかったように思います。気持ちがこめられている本心だとしても、状況に応じた適切な、いわゆる正論だとしても、相手との関係ができていなければ、それらは届かないことがある。ある時から、どうしたら私の気持ちをわかってもらえるんだろう、あの人言葉はあんなにパワーを持っているのに、それに比べて、同じことを伝えたいと思って言っているはずの私の言葉は全く届かない、というモ

ヤモヤを抱えていました。心からそう思って自分の言葉として、発信しているはずなのに目の前にいる相手にはなんの意味ももたないものなのだ、と分かった瞬間から、怖くなってしまったのです。何か問題が起こったときにだけ、もっともらしい正論を振りかざしても、結局なにもできない自分の無力さががっかりして、誰かを傷つけておしまいです。大事な場面で言葉を発して、それを聞いてもらうには日頃、どれだけ丁寧に周りの人と向き合っているかが問われるのだと学びました。まだ、しばらく余韻に浸りたいと思います。また、来年もぜひよろしく願います。

【三浦啓】桐生東部教会 雪掘りキャンプスタッフ 「冷静と情熱のあいだ」

今年も十日町教会を会場に「十日町雪掘りキャンプ」が行われました。今回の雪掘りキャンプはこれまで雪掘りキャンプを受け入れ、支えてくださった新井純先生が京都へ異動され、久保田愛策先生が赴任されて初めての雪掘りキャンプとなりました。2004年に新潟で「7・13水害」、「中越地震」が起き、その冬に中越地震の被災地が豪雪に見舞われ、兵庫教区の被災者生活支援長田センターが「十日町被災者体験雪かきツアー」を企画しました。当時、大学生だった私は、当時、長田センターでの働きを担っておられた柴田信也先生に誘われ、ツアーに参加しました。決して、「ボランティアとして何かをしに行く」というのではなく、あくまで被災地へ行き、被災された方々の（雪と共に生きる）生活を見て何かを感じる、学ぶ、考える、という趣旨で十日町へ出かけたのを覚えています。それでも、札幌出身の私は「被災地で雪かきのお手伝いができれば・・・」と意気込んで十日町へ出かけたのを覚えています。しかし、実際には、見たこともない雪の多さに度肝を抜かれ、ゴミの分別など決められた約束事を守れず支援どころか受け入れてくださる方々にご迷惑をおかけしてしまいました。そのような状態で最終日を迎え、「自分は何をしにここに来たのか」と自問しながら十日町駅まで歩いたのを覚えています。うまく表現はできませんが、面倒臭がりな“今が楽しければそれでいい”と思っていた自分が初めて、「人のために何かさせていただきたい」という気持ちになり、そして関西へ帰るのを止め、十日町駅から十日町教会へ戻るという行動に出ました。その時のちょっとした心の変化が無ければ、きっと牧師になることはなかったかもしれません。それくらい、毎年参加させていただいている十日町雪掘りキャンプは毎回多くのことを

学ばせてくれますし、大切なことにも気付かせてくれます。まさか、13年連続十日町へ足を運ぶなんて、牧師になり（関東教区の教会に赴任し）十日町雪掘りキャンプを受け入れる側になるなんて、最初に参加した時には思ってもみない今があります。

今回、これまで参加して下さっていた新潟地区や群馬地区、千葉や関西からの参加者だけではなく、関東教区の茨城地区や栃木地区からも参加者が与えられました。愛策先生が十日町教会に赴任されたことにより、茨城地区からの参加者が与えられたことは嬉しい広がりだなあと感じました。私もこの十日町雪掘りキャンプでたくさん育てていただき、よい出会いや経験を積み重ねてきました。だからこそ、たくさんの人たちにこのキャンプに参加していただきたいと思っています。きっと今回参加くださった皆さんもいろいろなことを感じ、学んだことと思います。

毎夜行われた学びの時では、新井純先生から「7・13水害」、「中越地震」、「中越沖地震」、「東日本大震災」の話、2日目は5年間東北教区被災支援センターエマオで専従者として働いてこられた佐藤真史さんから東日本大震災の被災地でエマオのスタッフとして携わり続けた話、3日目は同じくエマオでスタッフをされておられる柴田信也さんから「阪神淡路大震災」、「中越地震」、「雪掘りツアー(キャンプ)」、「東日本大震災」の被災地へ駆けつけるようになったきっかけから被災地で感じた、学んだ話などを聞くことができました。また朝の礼拝では豪雪地で牧会されている栃尾教会の手束信吾先生の話、中越地震の時に十日町教会に駆けつけた与那城初穂先生の話、昨年に続き、今回も雪掘りキャンプに参加してくれた飯塚共生くんの話の聞いたり、また東日本大震災の時に何度も東北へ足を運んだり、茨城の水害や熊本地震の被災地にも駆けつけた長倉先生の話も聞くことができました。また、最終日の礼拝では四街道教会の望月麻生先生の説教を聞くことができました。これだけ被災地に携わり、隣人と共に生きることを実践してこられた皆さんのリアルな話を聞けるなんて贅沢！と思いつつ皆さんの話を心に刻みました。

雪掘りの作業は教会の周りや十日町教会の教会員さんのお宅、栃尾教会などに4人ずつのグループに分かれて出かけて行きました。私は、毎日十日町教会の教会員さんのお宅にお邪魔し、雪掘りをさせていただきました。「雪掘りをさせていただいた」と言っても、30分雪掘りをすると、「あまり根を詰めると大変ですから休憩してください」と言われ、30分ほど休憩したり、休憩が終わって雪掘りを少ししたところで今度は

「お昼ご飯ができました。どうぞ中に入って下さい」と言っただき再び休憩に・・・しかも昼食をたくさん食べた後にコタツで昼寝までさせていただき・・・みんなが「これでいいのだろうか・・・」と思いつつお言葉に甘え、美味しい食事やお菓子、温かい飲み物にノックアウトされます。しかし、休憩の時間にそのお宅の方々と話をするのがどれだけ大切なことかと思うようになりました。いろいろな話をする中で互いに知り合い、相手の雪国での生活のこと、中越地震の時のこと、教会生活のこと、趣味のことも知ることができます。雪掘りでどれだけ雪を掘ることができたか、も大切なことですが、効率や速さばかりではなく、そこに生きる人にしっかり向き合うことの大切さも毎日の訪問と雪掘りの中で感じました。それを佐藤真史さんが2日目の夜のお話の中で「スローワーク」(エマオが大切にしている事)という表現で言葉化してくれました。頑張ろうと肩に力を入れていたのではすぐ疲れてしまいます。見えるものも見えなくなってしまいます。大切なことを忘れてしまいます。雪国で雪と向き合う生活をされておられる人たちは私たちのように“数日限定”の雪掘りをしているわけではありません。雪が降り積もる冬の間中、毎日雪と向き合う生活をしています。とても肩に力を入れていたのでは身体も心も持たなくなってしまいます。雪掘りと同じくらい、休憩をしながら過ごすのは、雪掘りをしたり、雪国で生活するコツのようなものかなあと感じました。

十日町雪掘りキャンプが終わり、参加者はそれぞれの場所へと帰って行きました。雪掘りキャンプで得たことをそれぞれが自分の生活の中で活かしていくのではないかと思います。私も学んだこと、体験したことを元に、自分中心ではなく、隣人に目を留めること、またスローワークを大切にしていきたいと思います。隣人と共に生きるという“情熱”は持ちつつ、肩に力を入れて一人で突っ走って失敗しないように、肩の力を抜いてあくまでも冷静に。

私たち「十日町雪掘りキャンプ」を受け入れてくださった久保田愛策先生、久保田瞳さん、新井節子さんをはじめ、関西から駆けつけてくださり雪掘りキャンプ運営のノウハウの引き継ぎを行ってくださった新井純先生、お忙しい中参加くださった講師の皆さん、温かく私たちを受け止め、支えてくださった十日町教会の皆さん、今回参加してくださった皆さん、参加者を送り出してくださいました皆さん、雪掘りキャンプを支援くださった関東教区宣教部や食事提供をしてくださった新潟教会の皆さんに感謝したいと思います。

【N. M】鹿島教会 社会人

雪掘りキャンプに初参加して

久保田愛策牧師が昨年3月に鹿島教会を辞し、4月から十日町教会に赴任した。久保田ファミリーがどのような生活をしているのかという興味が、キャンプに参加した最初の理由であった。仕事の都合上、2日目夜からの参加となったが、結果としては、想像していた以上に多くの豊かな出会いが与えられ、多くのことを学ぶことができたキャンプであった。

今までにも、震災被害の宮城、水害被害の水海道、台風被害の岩手と、労働作業ボランティアに参加した経験はあった。しかしそれらはいずれも「緊急支援」であり、「被災された方々の“非日常”から“日常”を取り戻すための作業をお手伝いさせていただく」という趣旨であった。そして、わずかではあっても、私たちが作業をした分だけ、確実に瓦礫等の「非日常」は除去されていった。しかし今回は、十日町の方々にとって雪は「日常」であり、私たちができることは、十日町の方々を毎日当たり前に行っておられる作業の、ほんの一部に協力させていただくという状況であった。そして恐らく、私たちが雪を掘った場所も、数日後にはまた雪で覆われたのであろう。しかし、私たちが行った雪掘りが、決して徒労ではなかったことは、ハッキリ感じることができた。私たちが雪掘りをするので、そのお宅の方々が1時間でもゆっくり本を読む時間ができたかもしれないし、また休憩時間にお茶を飲みながらおしゃべりしたひとときが、お宅の方々にとって少しでもホッとできる時間になったかもしれない。そんな小さな積み重ねを継続することが「共に生きる」ということなのだと言われた。

夜の学びの時間は、被災地に関わり続けてこられた佐藤さんと柴田さんのお話を伺った。お2人とも、丁寧に言葉を選びながら、静かに、しかし熱く思いを語ってくださった。その1つ1つの言葉の背後に、お2人が今まで出会ってこられた多くの被災地の方々の姿が透けて見えて、その言葉の重みに、何度も涙が出た。

「なぜ被災地に関わり続けるのか？」との問いに、柴田さんは「阪神大震災を経験して、他人事ではいられなくなったから」とおっしゃった。遠く離れた場所で起きている痛み（さらに言えば、距離が近くても自分の生活圏の外で起きている痛み）を「他人事ではなく自分の事として」感じる想像力。それは、残念ながらこの世界に（特にこの国に）圧倒的に不足しており、今回のようなキャンプに参加することで確実に鍛えられる。その点で、このキャンプの存在意義は非常に大き

いと感じる。

「隣人とは誰か？」との問いにイエスは答えた。「行って、あなたも同じようにしなさい。」その言葉の重みを改めて感じたキャンプであった。



【N. Y】鹿島教会 社会人

雪掘りキャンプに初参加して

雪はスキー場でお金を払って体験するものでしたので、あこがれの存在でした。今回、初めて雪掘りをして、想像以上に雪掘りが進まない事を知り、雪の大変さを体験させていただきました。自分一人ならまだしも、子ども達が雪で遊びながら動き回っている事も、「雪に埋もれるのでは?」「水路に落ちるのでは?」と常に目が離せず、とても疲れてしまいました。雪国の育児の大変さを感じました。

青年達や牧師達との交わりも、楽しかったです。自分の教会を客観的に見られ、他の教会の工夫や苦勞を知る機会となりました。いろいろな生き方をしている方々と共に働き、語り合うことができたのは、長いキャンプだからこそ、とても良い機会だと思いました。我が家の子ども達も、お兄さんお姉さん達に遊んでもらったり、ピアノを弾いてもらったり、とても楽しい時間を過ごさせていただきました。

とても小さなキッチンとカセットコンロで、30人分の食事が作られていた事にも驚きでした。やる気があれば何でもできるという事を教えられたキャンプでした。

【K. R】取手伝道所 社会人

「仕事調整して、安くない交通費かけて何故ボランティアに行くの?」と、言われることがあります。こ

れにはどうお返事を返したらよいか分からない。自分でも何故ボランティアに行きたくなるのか。うまく説明は出来なかったのです。

夜の学びの時間に、神戸の長田で、そしてエマオでずっと支援に携わっている柴田さんのお話を伺いました。柴田さんは何故関わり続けるのかという問いに、「困っているだろうなあ。つらいだろうな。と思うから」(実際には関西弁で少しニュアンスが違うかもしれませんが)とおっしゃいました。その言葉にこみ上げるものがありました。

わたしに出来ることはささやかなことでしかありません。けれど「寄り添うこと」を思うとき同時に「行ってあなたも同じようにしなさい」と言われたイエスさまを思います。

何故行くのかの問いにうまく説明できる必要はないのだと思いました。

私がお手伝いさせていただいたお宅に長倉先生が立ち寄られた時、おじいちゃんがとても喜んでおられました。地元の方たちは「待っている」のだと思いました。それは13年も毎年続けてこられた先生方の功績だと思いました。

昼間の働きで疲れているのにも関わらず夜通し語り、カードゲームや枕で遊ぶ青年たちを見て、心があたたかくなりました。

知らないことがまだまだたくさんある、と思います。出会いと学びのキャンプでした。ゴキブリポーカールというゲームを初体験！J先生が「俺ってユリ・ゲラーかも」と言ったのに負けた時は嬉しかったです。



【K. H】 取手伝道所 小学生

初めて十日町に行きました。雪が自分の背より高く

つもっていてびっくりしました。

久しぶりにみっちゃんに会えてとてもうれしかったです。

教会の雪を運ぶのはとても大変でした。運んでも運んでもあるのでつかれました。

帰ってきたら、今日も十日町に雪が降ってるかなあっていつも思っています。

また、行きたいです。

【柴田信也】 東北教区被災者支援センターエマオ 雪掘りキャンプ講師

「ひこばえ」

全国的に降雪量が多いと聞いていたのですが…、十日町駅に降り立つと昨年並みの積雪量の少なさ。少し肩の荷が下りたというのも、実質3日目からの参加ということで、十分な労力になりえないなあと思っていたからです。また、今回は栃尾教会にうかがえず残念でありましたが、手束信吾さんが参加されていて十日町教会でお会いできたことに大変うれしく思いました。

今回まず驚いたことは、参加者の多かったことです。そのためにか貸布団が足りず、いささか寒い思いをすることになったのですが…。関東教区の呼び掛けとなって3回目。回を重ねる毎、150%増の成長率。部分参加などを加えると総数32名。実際、これほどに人数が増えることは「想定外」で、まさにうれしい悲鳴です。ワーク先の割り振りやら、移動手段、スコップなどの用具の手配など、裏方さんはそれなりに気を揉みます。

多くの人が集まれば、そこに多くの出会いが生まれます。それが大きな喜びに結ばれていきます。その単純な積み重ねが好循環を産み、今回このような大所帯となったのでしょうか。“はじまり”は、いつ終わっても不思議でないほどにか細く、貧弱に思えるかもしれませんが。しかし、志を掲げて真摯に向き合い、丁寧につながりを模索し、祈りを合わせ、時を共に重ねるで、そして継続することから、時間を超えてつないでいくことで困難を超え、その具現的な姿を間近に見させていただき、その“はじまり”の大切さをしみじみと心に深く味わった4日間でした。

勿論の基底には中越地震があります。その悲しむべき事実を除いて考えることは出来ません。今も中

越地震からの学びをあらたにしつつ、次の災害と合わせて学び合うことはとても有意義であると感じます。すなわち、災害は遠いどこかではなく、わたしたちの近くで、また頻繁に起こっているという事実を受け止め、そしてその災害が起こる中で、同じ過ち、同じ悲しみを繰り返さないための営みが、場所を変え、人を変えてつながれていく。ここに集まった人の中にも「被災」を経験したものもあり、これからもその担うべき役割があることを改めて知る機会となったことと思います。これまでに重ねてきた雪ほりに参加された一人一人に新ためて心から感謝したいと思います。

また、受け入れてくださった十日町教会をはじめ、新潟地区や関東教区のみなさまに重ねて感謝申し上げます。十日町教会とは昨年を最後に、しばらくお訪ねすることは適わないと思っていましたが、一年ぶりの再会はこれまで以上に和やかで朗らかで親しみ深く感じられました。

中越地震から13年経ちましたが、この災害を過去のものとすることなく、新たに学び合うことの契機として続けられること、これからも多くの方々の志が重ねられていくことを願います。

地の裂け目に撒かれた小さな種が、時を経て芽吹き、空に向かって枝葉が伸び行くように、しっかりと地の深くに根が張る姿となり、“ひこばえ”が大きく成長することを願ってやみません。

